

やり直しのできる社会を！

新宿連絡会NEWS

2015.12.6
VOL. 67

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議
〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-6-10
関ビル106号 NPO新宿気付
TEL.03-6826-7802 FAX.03-5273-6895
<http://www.tokyohomeless.com>

それが、あたかも日常のよう

笠井和明

また、冬である。

バブルがはじける前だから、もうだいぶ昔のことになる。私の山谷デビューは冬のパトロール活動（巡回活動）からであった。

当時は暗い街並をリヤカーに雑炊を乗せ、路上で毛布にくるまるおっちゃん達に一人ひとり声をかけ、雑炊を渡したり、カイロを渡したり、様子を聞いたり、そんな活動で、長く週末を過ごしたものである。当時は終電も早く、乗り遅れるのは当たり前、24時間喫茶も珍しく、サウナやカプセルは上野にあったものの、そこに泊まる金もないので、駅近くの公園で一人アオカンをしながら始発を待っていたものである。

地区内で野宿をするおっちゃん達は、今思えば、そんなに多くはなかった。日雇の仕事はわんさかあった。なので、現役の人はその日暮らしのなれの果てで野宿をし、次の日には仕事に出かけていた。まあ、多いのは、モガキ（辻強盗）にあつてすつから

かんか、病気であまり身体が動かないか、高齢で仕事が出来ないおっちゃんが過半だったような気がする。

バブルがはじけて（実感的には世間が騒ぐ前からであるが）仕事なくなると、雑炊をのせたりリヤカーの前に人垣が出来るようになった。それは、山谷地域の枠を超え、仕事を失ったおっちゃん達が、ターミナル駅に目立つようになった。当時、上野や新宿には良く行ったが、駅手配がある場所は、どこもかしこもと云う状況が、いつの間にやら広がった。高度経済成長期に飯場制度、住込制度が組み立てられ、そこに隠蔽された訳ありの底辺下層の人々が、一気に都市部に露見した格好であった。

時代の変化と云うのは、あまりにも突然、そして、あまりにも過酷に訪れるのであるが、それに社会が気付くまでは、かなりの時間を要したようである。

その頃であったか、その前であったか記憶は定かではないが、上野公園で実施していた台東福祉の深夜の「狩り込み」（正式な事業名は別にあったのであろうが、下層文化の中で語り継がれて来た隠語にそれに、あまりにもそっくりであった）に遭遇した時がある。たまたま遭遇したのではなく、事前に情報を有して待ち構えていたような気もするが、それも、昔話なので定かではない。

暗闇の公園内に進駐軍の幌付きトラックを思わせるような車両がゆったりと走る。台東福祉の職員はおそらく大勢はいなかったように思う。警察官もいない。業者のような人々が、公園内に野宿しているおっちゃんに静かに声をかけ、拒否されたらそのまま何も云わずに通り返り、反応のあるおっちゃんは肩を借しながらトラックの荷台に「積み込む」。あまりにも無防備なので隙をつき、トラックに乗り込





んだことは覚えている。若気の至りの正義感で、無理に載せられているのなら解放してやろうと云う思いだったのだろう。何人のおっちゃんに暗闇の中で話をしたと思う。でも、皆、無言。一緒に逃げよう云うおっちゃんは一人もいなかった。業者は私が中に居ることは気付いていたのだろうが、そんなことは眼中にない。ちょっと走り、止まり、ちょっと走りは止まりを続けている。これから役所に立ち寄り、シャワーを浴び、宿泊所に行けるそうである。それを期待しているのか、いないのか、あまりにも暗いので表情は分からない。でも、声のニュアンスで、その「致し方なさ」だけは分かるような気がした。

新宿の底辺史で忘れるべきではない80年バス放火事件以降、その「対策」として形になった「環境浄化パトロール」には、何故か遭遇したことはなかった。公園と、繁華街、その形態はかなり違ったことであろう。こちらのただ排除すれば良し、もしくは一時的に収容しておけば良しとする姿勢は、後の強制排除事件につながる。

それと、比較するのが良いのか、悪いのかは分からぬが、今も心に残っているのは、上野の「狩り込み」の淡々さである。狩り込む方も「ここは皇室も来るからね…」と、あえて思ってもいないような理由をつけ、狩り込まれる方も、それが、あたかも日常のよう受け入れる。この緊張感のなさは、何とも地域社会の滋味を感じさせられるものでもあった。ここで、この地に根付く戦後を知らない部外者には何も語れないと、私たちは、静かにその場から去った。

あれから、路上の冬を何度と見て来たのであろうか。もはや回数を数えるのは何ら意味を感じなくなっている。あれから、何が変わったのであろうか。もしかすると、彼、彼女等との関係性は、何ひとつ変わっていないのかも知れない。

社会は「異形、異端」を差別し、排除し、同化しようとする。それを笑いや、文化の中でなんとなく包摂しようとする水木しげる先生も亡くなった。今や、競争社会の「勝ち組」が「違いを認め合おう」と、実態のこもらない「平和論」、「平等論」を語るだけである。こう云う社会だから、路上への襲撃事件は報道されないだけで、私たちの目の前で常に起こり続ける。

この秋、戸山公園で中学生か高校生か、そんな連中が仲間を攻撃する事件が相次いだ。そんな時、「謝れば許してもらえるんだ」と言い、事実、そうした仲間の話に、私は涙した。それは、あまりにも違うよと、でも、そうするしか無かったのだよね、相手は集団だし、俺らには体力も残っていないし…。とにかく、泣いた。

その時、思った、その昔、あの「狩り込み」の時、何も出来ない自分と社会に、仲間と一緒に泣けばよかったのかも知れないと。

泣くことで明日が見つかるのであれば、下手な能書きを垂れるよりも、そうすべきである。

まあ、それはともかく、冬である。

東京で一番寒いのは、年が明けた2月頃である。雪が降るのもその頃である。年末年始だけどこかに泊めて、それで済むのは日雇労働者対策であり、それはそれで今でも意味がある（年明けに仕事があればの話であるが）のだが、路上生活者対策として見れば、今はそれにあまり意味付与は出来ない。どうせ、泊めてくれるのであれば、そこから先の夢を見させてもらいたいし、他力本願で云うならば、それを実現させてもらいたいのが、本音であったりもする。

状況は年々変わっている。また、対象も年々変わる。いつまでも同じであると思う方が、現場を知らぬ硬直した発想以外の何者でもなく、「変わらぬ夢」を求める迷い者の戯言である。それなのに、大きな声の、おかしな情報に惑わされ、社会もまた迷走を続ける。

この秋、新宿路上の国勢調査に協力する機会があり、予想に反し調査票が次々と集まった。

支援団体と云うものは、普通、自分達が支援可能な対象者の人数をある程度までおさえる（おさえない団体も実に多いが…）。私たちが云えば、新宿の路上で生活を余儀なくされている人々がどの位の規模で、どの地点に顕著に集住してと云うのは、常に意識し、更新し続ける基本的情報である。なので、パトロール隊には「カウンター」が必須であり、年がら年中「カチ、カチ」しているものである。年に

2度しか調査をしない東京都の「概数調査」と言うものもあるにはあるが、マスコミと違い、私たちにとって、それは昼間人口の参考程度の数値でしかないので、鵜呑みにはしていない。

そんな独自に数字を集め、状況を見つめ続けて来た私たちでさえ、今回の国勢調査の反応は意外なものであった。

結果、100名程、私たちの活動の範疇から漏れていることが分かった。簡単に言うならば、終電前と終電後の誤差である。昼間と夜間（終電前）との差は約100名とは分かっていたが、夜が深まるにつれ、そこに約100名が加わる。

極めて特殊な地域的特性なのであろうが、これが新宿の街の姿なのである。それを今回の調査でつぶさに見ることができ、改めてこの街の深淵さを知った。「昼間」「夜間」の単純な二分法では決して計り知れないのであり、それこそ定点観測を24時間続けていなければ、平均してどの程度の実数があるのかは分かり得ないし、現実的にそれは、ほぼ不可能である。

なので、昨年同様、私たちがこの冬、より、立ち入る領域は「夜」である。

新しい試みに転換して、その試みが未だ試みにしか過ぎない内、季節がめぐり、また同じことを続けなければならないのは、一般的には、かなりの労力でもある。しかも、それが暗く凍える夜の街であれば、尚更である。

しかし、それがまるで苦にならず、あたかもさりとってやってのけてしまうのが、連絡会の連絡会たる所以である。「冬は毎年来るからね」と小さく呟きながら。

それが、あたかも日常のように、である。

もしかすると、こうやって（一つの社会問題に限定した）「都市機能」（都市の豊かさ）と言う奴の萌芽は自ずから作られるのかも知れない。この街に埋没し、埋没した連絡会の結論は、もしかすると、こう言うところにあつたのではないかと夢想をする。

握り飯作って、街中を歩き、生活に行き詰まった人に手渡すことぐらい、誰にでも出来る。何も特別な行為ではない。この国では、どの時代でも食い倒れの人には、または、行乞の人にも、握り飯握って「これしかないけど」と、庶民は、それに功德があるだろうが、なかろうが、自然に手渡し続けて来たのである。

「我欲」の時代にあつて、そう言う習慣は消えたかのように見えるが、習慣と云うものは恐ろしいも

ので、役所にだけ任せるのではなく、歴史と同じ行いを、無意識に私たちは続けている。

関係性とは、おせっかいでは築かれず、こう言う自然な振る舞いから始まる。

そして、家がなければ、「一宿一飯」となるのであるが、残念ながら、今の都市ではこれが大きくできない。路上を使い、公園を使い、役所を使い、民間を使い、それでも不足が大きいので、自らも作りと、してきたが、こればかりは自然にとはいかないし、計画的にもいかない。

資源の不足は自然なつながりを断絶させる。

だから、路上は孤立し、「異形化」される。

若干であり、短期であるが、その家を確保して、私たちは冬に臨む。だから、優先順位をつけざるを得ない。申し訳がなく、まさに力不足なのであるが、キャパがある以上、泣きながら割り切ることも必要である。そんな重荷の線引きは、私たち、日常的に接している人間にはなかなかできないので、経験豊富のパトロールチームや医療チームがその役割を担う。

冬に打ちのめされ、社会の弱さに打ちのめされ、自らの力量不足に打ちのめされ、北風に吹き飛ばされ、雪に埋もれ、死に最も近く、何もかもがどうしようもない中で、それでもつながりの暖かさだけを信じ、信じ、裏切られても、信じ…。

こんなことを書いてみると、まるでこれは、「おしん」の世界である。やれ、やれ。

まあ、実際のところは、明るく、適当になのであるが、そのスタイルは未だ未熟で完成はされていないし、この冬に完成するほど、その課題は簡単なものではないのである。

ホームレス自立支援法の賞味期限は残り1年ちょっと、今や、ホームレスは時代遅れと、生活困窮者



支援が主流である。中には名前まで変えてしまうトンデモ団体も現れ、金も人も、何もかも、あちらの方に動いてしまった。何もかもでなく、ちょっとは一つのこと集中しろよと、言いたくもなるが、移ろう世間とやらは、そんな「ぼやき」一つでは、どうにもならない。

生活困窮者でも何でも良いが、その中で、安定した家のない人々（ホームレス者）の諸問題が何故優先課題とならないのか。新宿と云う特殊な都市に居ると、そんなことを今も考える。

おそらく方法論の問題だと思うのであるが、ホームレス自立支援法を徹底しなければ、それはさておき困窮者支援をやりましようと言ったとしても、おそらく、それは中途半端になるように思うのである。

ホームレス対策の立場からすると、今の生活困窮者対策は「予防策」となるのであるが、都市部においては自立支援センターなどで、その機能はしっかりとある。流民対策ではなく、住民対策として、それにプラスする機能があったとしても、それはそれで良いとは思ひ、必要なであろうが、だからと言って現に野宿を余儀なくされている人々への断続的な支援の手を緩めて良いと云うことにはならない。理想を言うならば、路上対策も、予防策も両輪のよう、力を入れてとなるのであるが、法律できても、共に力を注げるような予算構造になっていなければ、住民対策に重点が置かれるのは地方自治体の性からして、そうならざるを得ない。そうなった時には時既に遅し、ホームレス対策を切り上げた自治体は、いくら文句を言ったとしても、もう二度とその道へ進みはしないであろう。

まあ、それが地方都市ならば、まだしも、オリンピックを控え、テロ対策もしなければならぬ、毎日のよう地方から働き人を吸収しなければ都市構造が成り立たない大都市の場合は、とりわけ慎重に考えるべき課題であろう。

東京でさえ、23区の温度差は激しい。概数調査

に現れるホームレス者に対してさえ、大したこともしていない区を中心に、対策上の諦めムードが蔓延している。「巡回相談」も形骸化が進んでいる。

いきつくところは、まさに「異形化」である。

そうやって、山谷の歴史は、どの地でも繰り返され、何ら解決されることなく、風化の道を辿る。ホームレスと呼ばれた時代も、こうやって終わり、そして、また、どこかで名前を変えて再燃するのだろう。

それでもである。この世に生まれた以上、その生育の環境がいかに極貧であろうとも、競争社会にいかにか破れようとも、学歴がなかろうとも、その昔、やんちゃ故の逮捕歴があろうとも、今の基準の仕事がいかに出来なかろうとも、どれだけ不器用な生き方であろうとも、コミュニケーションが苦手であろうとも、大した仕事があろうとも、派遣だろうが、日雇だろうが、雑業であったとしても、そして、結果として家がなくなったとしても、この、とんでもない社会の中で七転八倒してでも、人に差別されることなく、僻みを感じることなく、生き生きと、生きてもらいたいのである。自分の器にあった安心できる居場所を見つけ、そして、そこで小さな幸せをつかんでもらいたいのである。そして、そのための都市であってもらいたいのである。

私たちの原動力はただ、ただそれだけである。

だから、今も、暗い街並を、リヤカーではなく、大きな荷物持って、路上で毛布にくるまるおっちゃん達に一人ひとり声をかけ、握り飯を渡したり、カイロを渡したり、様子を聞いたりする。

年末だろうが、クリスマスであろうが、そんなものには動じず、静かに、静かに。

交通機関が動いてしまう大晦日だけは、新宿の片隅の公園に休み所を作り、年に一度の宴会があることはあるが、それは、きっと、静けさの中の一瞬の幻であろう。

それが、あたかも、都市の日常となれば良いと思う。

(了)



1

野宿の冬はきつい。身も心も冷える。ついでに言葉まで凍る。もっとも、これは季節によらないかもしれない。路上の言葉はいつも、どこか寒々としたところがある。

ある時期、区内の某公園を根城にする有志がいた。折に触れ、一宿一飯の恩義にあずかった。夜空をながめ横になり、感じたのは誰かに話しかけてほしいということだった。慣れとともに人恋しさが薄らぐか、逆に高じるのか、確かめる域に達しなかった。

いくつかの著作に、参考となる手がかりが残されている。例えばニューヨークの街角で採られた次のせりふは、切なさを伝えてあまりある。「ホームレスになって何が辛いかわかるかい…孤独って奴さ…もう一週間も満足に口をきいてねえよ。喋らないと言葉まで俺から逃げて行きやがる」(松島トモ子『ホームレスさん こんにちは』)。

海を隔て、東京にも似た例が見つかる。ドヤの住人は、そこでの暮らしがいかのどを害するか、こんなふうにいっている。「つまり、声を使わず、声帯を使わない日々が何週間も続くことになったのだ。…声を出そうとすると、声がかすれ、のどが詰まった感じで、満足な音声にならなくなっているのに気づいた」(大山史朗『山谷崖っぶち日記』)。沈黙は、おそらく冗舌と紙一重。路上で声をかけると、氷を砕くがごとく話し出す相手がいる。筋がもつれ、堂々巡りを繰り返す。漠たる地名や人名を散りばめ、周知のように展開させる。脈略がつかめず、応答に戸惑う。

支援の場であって、支える側はたいてい能弁で、他方は口が重い。それを一因として、前者に優位がもたらされる。際限ないおしゃべりに面し、こうした関係が怪しくなる。逃げかけた言葉を離すまいと、先手を打たんばかりの勢いに、こちらが押される。

この点についても、すでに証言が得られている。かつて横浜で勤めたケースワーカーは、断酒の集まり(アルコールクス・アノニマス)へ足しげく通う。そこで能率的に交わされるのと違う、異質な声の響きを耳にする。塗炭の苦しみを訴える、粗削りな音の連なり。世間並みの行儀よさに収まらない、破格な語法。

それこそが言葉の原初、そんな思いに駆られる。

「寿のミーティングの特徴は、言葉を生きてこなかった人がアル中になった結果、AAによって初めて口を開いて話し出したことを感じさせる、プリミティブな語りにある。…ここにいる人たちに比べると、私は話しすぎた。今はただ聴くだけでいいと感じて座っている」(須藤八千代『ソーシャルワークの作業場 寿という街』)。

2

不足を補うのが支援の要なら、言葉について同様でおかしくない。さしあたり、会話の下地を築くのが眼目となる。対人援助の入門書は、求められる技術の筆頭をその説明に割いている。「コミュニケーションのスタイルとパターンが非常に重要である。…我々が使う言葉、声の調子、話のスピード…人々をほっとさせ、効果的に仕事ができる効果的なリスナーになること…」(ニール・ソンプソン『ソーシャルワークとは何か』杉本敏夫訳)。

当たり前のことほど実践が難しい。場合によって、それは文字通り生死をわける。路上を巡っていると、まれに「死にたい」ともらす人と会う。口外する者は、めったにそうしないというのは俗説として退ける。薬や刃物で自傷しかけていたら、制止を優先する。ある程度落ち着いて話せる時、どうやって翻意を促すか。

こちらとしては、役立ちそうな知識をすべて教えたくなる。福祉事務所、病院、法律家、専用電話、民間団体、宗派、政党支部。どこかへつながれば、解決の糸口くらい探せるはず。ただ、せつば詰まった精神状態に、すんなり聞き入れられるか疑わしい。かえって徒労感を募らせかねない。

どんな正しい情報も、きちんと伝わらなければ効果に乏しい。ある女性向け施設の職員は、すれ違いを防ぐ手立てを端的に「その人にわかる言葉で言ったときに、人は変われる」(須藤・宮本節子編『婦人保護施設と売春・貧困・DV問題』)と表現する。

路上で人と接するのは制約を伴う。長居しづらく、再会の保証もない。深刻な内容に、なおさら気がせく。それでも起承を意識したい。まずはやんわり「それは大変です」「そんなにお困りですか」と同調を図る。相談の受け手は、自分が答えなくてはと気負いがち。立場をずらすのも試すに値する。やや芝居がかって、いつそこちらが絶句し、途方にくれる(振りをする)。話の接ぎ穂を相手にゆだね、言葉尻

をなぞりながらついていく。

切り上げ時をいつにするか、正直なところわからない。関心をよそへ向けるのが、一応めどといえる。「温かいものを飲みたい」や「明るい場所へ行ってみる」など。事務的なやり取りは、それからで間に合う。相談の窓口を知らせ、同行できる旨を告げる。

以上の流れをまとめ、次のように定式化される。「援助場面で援助者がクライアントに伝えるべき言葉があるとすれば、それは相手を救う言葉でも、サービスを提供する言葉でもない。まずは関わりを育てようとする言葉である。…この順序を逆転させてはならない」(尾崎新編『「ゆらぐ」ことのできる力 ゆらぎと社会福祉実践』)。

3

野宿の世界には、独特の言い回しや隠語めいたものがある。多少通じておくと、便利かもしれない。支援者がよく悩むのは、相手を何と呼ぶかだろう。本名を尋ねるのははばかられ、あだ名では不遜すぎる。

旧来の活動家は「先輩」を用い、練達の年長者に敬意を表す。こちらが年かさで、向こうが相対的に若返ると、ちぐはぐな感じになる。「おじさん」は一般的だが、年齢の枠があり、女性に適さない。

当人たちは、この辺をうまく切り抜ける。自分を「こっち」、先方を「そっち」と称する。例えば「こちらは仕事へ行けているけど、そっちはどう」といった具合。これはほぼ万能で老若、男女を問わない。

路上の隠語は、少なからず寄せ場に起源をもつ。新宿あたりでは都心の波にもまれ、意味を変え、やがてすたれたりする。いくつか拾ってみよう。

〈アオカン(者)〉。語源に諸説あり、「青空簡易宿泊所」の略が有力。建ち並ぶドヤにすら泊まれない悲哀、自嘲がこもる。90年代半ば、山谷の記録ではこう認識されていた。「…三つ、はっきりと異なる階級があります。トビと職人が頂点です。…次が土方…その下に来るのがアオカン者…働かないために、路上生活を余儀なくされている人たちです」(エドワード・ファウラー『山谷ブルース〈寄せ場の文化人類学〉』川島めぐみ訳)。新宿でこの語を使うのは60歳代後半から。序列にまつわる屈託は小さい。

〈トンコ〉。劣悪な飯場、手配師の下から黙って姿を消すこと。報復の恐れがあり、寄せ場の運動の背景をなす。転じて、福祉関連の施設、宿泊所

の無断退出を指す。役所の担当者の不評しきり。本人にすれば「そうするほかなかった」、これは昔も同じ。用例は激減。

〈仲間(たち)〉。70年代初め、釜ヶ崎で配られたチラシに次の文言あり。「釜ヶ崎で働くすべての仲間たち！ いまだ暴力現場、追い回し現場は無数にあり、泣き寝入りしている仲間も多い。わが釜共闘は…」(寺島珠雄編『釜ヶ崎語彙集』)。おそらく、これが原型だろう。すなわち「働く者どうし」の意。離散性の歯止めに、運動体が持ち込んだとも読める。今はもっと広く「苦境を共にする」といったところか。女性の野宿者は賃労働に強くくみせず、一員に数えられるのをためらう節がある。

いずれも仕事からみで、労働の街に発したゆえんを感じさせる。その消長は、寄せ場の変質と重ならざる得ない。単に衰退でなく、派遣業界などの用語とすり合わせた結果、広域化を示唆するかもしれない。ともあれ、現時点が過渡期なのは間違いない。

ちなみに、こちらが新宿で届ける週刊紙は常に「仲間たち」の呼びかけで始まる。組織的な支援と縁遠い、郊外に寝泊まりする者が、同じ語をふとつぶやくことがある。いまだ空言でない傍証に添えられる。

4

口数が少ないなか、野宿の男性はどちらかといえば仕事の話で興に乗る。技能の習熟、しくじりを懐かしそうに振り返る。世の中の職種の多さに驚かされる。これもいくつか、聞き取ったところを挙げてみたい。

〈強電・弱電〉。電気の工事配線の別。大ざっぱに強電は家電系、弱電は通信系。特殊なところで美容室は強電、経験と腕がいる。弱電はメタル、光ファイバーの交換が盛ん。路上に各々の職人がおり、後継難を嘆いていた。

〈掘削オペレーター〉。地中や海底を大型の機械で掘り進む、操作技師。少人数の現場で、事故によって炭鉱規模の犠牲を生まない。12年、岡山沖で現に落盤があった。5人死亡。その際、公園で教えられた。

〈スターズ・ストライプス〉。米軍の広報『星条旗』紙のこと。敗戦を基地の街で迎えた男性が、配達のアルバイトをした。駐留米軍人宅へ、新聞を入れて回る。チョコレートやジュースの余禄があった。少年時代の思い出さえ、仕事と結びつけるのが男ならでは。

〈船乗り〉。元船員と何人か会った。福利厚生が一般と違う。陸に上がって緊張がゆるみ、散財してし

まう。また海で稼ぐつもりが見込み外れ、身動き取れなくなった。そろって、こんなてん末を述べた。

話のなかに願望、伝聞、誇張が混じりうる。「船乗り」は、港湾労働に色をつけた経歴かもしれない。自衛隊の精鋭部門出身という男性がいた。前段はともかく、後半はどうだか。これらを「うそ」で片づけるのは早計にすぎる。やせ細った事実より、豊かな虚構のほうが生き延びる糧になる。

90年代半ば、ある雑誌が新宿で密着取材を行う。対象となった野宿者の死後、実情がまったく異なっていたのが明らかとなる。それを知って、なお記者はこう書き足すのを忘れなかった。「私はしかし、おとつあんにだまされたという不快感も、虚妄を見抜けなかった自分への腹立たしさも感じなかった。むしろ『幻の家族』を語ったおとつあんのほうがより彼の真実に近いように思えた」(中村智志『路上の夢 新宿ホームレス物語』)。

もう少し深い意味で、不全感の残ることがある。かなり親しくなったのに、口ごもってはぐらかされ、核心から遠ざけられているような。

80年代初め、横浜で中学生が野宿者を襲い、15名の死傷を出す。後の事例の先駆けを画した。地元紙の記者は衝撃を受け、丹念に調べて歩く。その過程で、どうしても踏み込めない被害者個々の内面に突き当たる。

近づくほど陰が濃くなる、可視と不可視のパラドックス。「…その人の心の中の一部を知って、それだけで日雇労働者のことがわかった、その人間のことをわかったつもりになってしまう、そういう危険性を寿町という町は持っています。…だれか一人の人生を語ればすむということでもないし、そういう形で伝える必要もないと、私は考えています」(青木悦『「人間」をさがす旅 横浜の「浮浪者」と少年たち』)。

5

野宿の女性とどうかかわるか、一概にいけない。女性の支援者を話し相手に決めておくことはできる。とりわけ男性とカップルの場合、そのほうがいい。へたに男が寄ると、いらぬ勘繰りを招く。

男女の仲は世間のそれに準ずる。円満がある半面、暴力の介在を疑わせることも。取捨に乗り出すつもりなら、それなりに覚悟がいる。いずれにせよ、本人と長話は望めないだろう。

単身の野宿女性はいったん打ち解けると、意外と私的な話題に及ぶ。生い立ち、家族、趣味、結婚生活を問わず語り。一度など、育児経験を詳しく伝える者がいた。男性との間で、こういう生々しさはあまり味わえない。彼らの口ぶりはどこか上辺で、社

交辞令めく。

男女の比較に正確を期すのは、実はひどく壁が高い。路上の談話は基本的に男っぽい。男どうし、男について、男が語る。その調子に染まるほど、女性の声が遠のく。ここに最大のパラドックスと欠落がある。

男声が支配的なのは、いうまでもなく女性の野宿者が少ないから。これは女性の問題が皆無なことを意味しない。かつて男ばかり目立つ寄せ場の状況へ、こんな疑問がぶつけられた。「山谷にやってきた男の、『捨てられた』家族はどうなってしまったのだろうか。逃げるという選択肢さえも与えられずに…女はここでも沈黙の大多数を構成するだけなのだろうか」(ファウラー、前掲書、訳者「あとがき」)。

時と場所を移し、偏りは変わっていないようにみえる。08年暮れ、派遣切りの失職者に備えるべく、日比谷公園で〈年越し派遣村〉なる催しが営まれた。身を寄せた約500名のうち、女性のごくわずかだった。パラドックス、再び。「…派遣村にやってきた人の中で女性は少数だった。…『派遣村は貧困を可視化した』と言われていたが、可視化されたのは『男性の貧困』だけだったのではないだろうか」(宇都宮健児、湯浅誠編『派遣村 何が問われているのか』)。

各種資料によると、少なくとも60年代初めまで、寄せ場には母子がいた。以降、政策的な計らいで、急速に減っていく。無籍、不就学が改善され、意義は小さくなかった。一方、女性は戸々の家事にまぎれ、言葉を身辺へひそませていった。生別による母子世帯は肩身が狭く、特に発信が弱かった。大筋として、そう顧みられる。「…社会福祉の行為概念の対象者であった女性と子どもの言葉が、ずっと抜け落ちたままだ」(須藤八千代『母子寮と母子生活支援施設のあいだ』)。

路上に女声はまばらで、それが当然のごとく、そのこと自体言及されにくい。言葉が二重に凍りついている。「…当事者とは…まず言葉を奪われた人たち…フェミニズムがやってきたことは…女が言語を獲得していく過程…」(上野千鶴子『生き延びるための思想 新版』)。

女の問題を女声的な音色でとらえ、その譜面に男も和してみる。婦唱夫随。いうは易く、行は難し。そこに因習や郷愁と距離を置き、凍える言葉をときほぐす光明がともるように思う。「回復は語ることから始まる」(浦河べてるの家『べてるの家の「非」援助論』)。

さりげなく、それがあたかも日常のよう

2015~2016

新宿年越の営み

2015年12月27日(日) ~ 2016年1月3日(日)

<ところ> 新宿区、及び周辺の路上

おにパト準備 27日~3日まで13時半より高田馬場事務所
ミーティングは27日~3日まで16時より高田馬場事務所
餅つき大会29日、年越し祭りは31日、臨時宿泊施設も用意し、
あとはひたすら朝まで歩き回り、仲間の寝床を静かに支えます。

年が明けても、見捨てない。

冬はこれからである。

主催・新宿連絡会03-6826-7802

新宿連絡会 会計報告

2014年度新宿連絡会収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
I 計上収入の部		消耗品費	47,887
1 寄付金収入	1,879,742	事務用品費	7,930
		衛生管理費	28,630
計上収入合計	1,879,742	支払手数料	14,776
		車両費	17,244
II 計上支出の部			
1 事業費		計上支出合計	1,728,253
弁当おにぎり事業	832,231	計上収支差額	151,489
越年越冬事業	590,987	前期収支差額	△627,919
その他活動事業	29,603	次期繰越金	△476,430
2 管理費			
旅費交通費	76,225		
通信費	82,740		

今期も多くのご支援を頂き、ありがとうございます。
頂いたお金は連絡会の運営費や仲間のために全て使い
切っております。必要性のある活動が続きますので、今
後ともご支援宜しくお願い致します。

2015年度4月~10月新宿連絡会収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
I 計上収入の部		消耗品費	45,260
1 寄付金収入	1,507,520	事務用品費	10,200
		事務所費分担金	280,000
計上収入合計	1,507,520	衛生管理費	25,201
		支払手数料	22,352
		車両費	232,278
II 計上支出の部			
1 事業費		計上支出合計	1,422,533
弁当おにぎり事業	525,467	計上収支差額	84,987
越年越冬事業	0	前期収支差額	△476,430
その他活動事業	35,260	次期繰越金	△391,443
2 管理費			
旅費交通費	68,250		
通信費	178,265		

●活動カンパ 振込は、郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

オンラインカンパは、<http://www.giveone.net/>「Give One (ギブワン)」(登録NPOを探すをクリックし新宿連絡会を見つけて下さい。)からだとジャパンネット銀行、クレジットカードで寄付が可能です。

●郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所にお願いします●

★郵便物は

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号 新宿連絡会 宛てでお願いします。